

中山勝博助教授追悼特集号の発刊にあたって

島根大学総合理工学部地球資源環境学教室

学科長 小室 裕 明

2001年8月30日、当教室の中山勝博先生が、アフリカにて研究調査中に不慮の事故で逝去されました。突然の訃報に私たちは言葉もなく、ただただ悲痛な思いで遺骨になった彼の帰国を迎えねばなりませんでした。

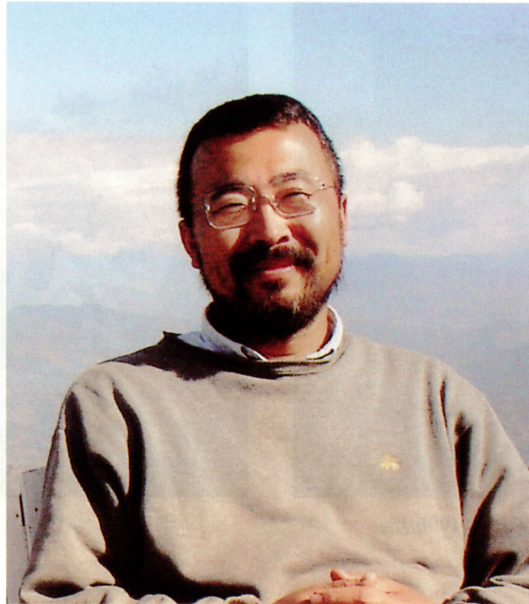
中山さんは、いつもニコニコしている柔和な風貌とは裏腹に、鬼のごとく仕事をする男でありました。業績リストをご覧になれば、それはたちどころにおわかりいただけるでしょう。高校教員時代でも、昼間研究をしたいがために定時制高校への異動を希望したほどです。とくにここ数年は、文部省在外研究に意欲的に応募してオーストラリア・クィーンズランド大学のC. R. Fielding教授のもとで河川堆積物の研究を行ったり、ネパールやアフリカの調査に参加するなど、彼の研究の幅と人的なつながりは際限のない広がりを見せていました。それは、ほとんど貪欲ともいえるほどでした。また、8月の初旬には地学団体研究会の会長に就任したばかりで、まさにこれからというときの悲劇でありました。

中山さんの研究者としてのスタートは早いとはいえません。また、教育系学部出身で、大学院にも進学しませんでした。おそらく、理学部出身者ほどには学生時代に十分な研究のトレーニングを受けられなかったのではないかと思います。彼は、そうしたハンディを、彼個人の努力と、団体研究という組織の力で克服しようとしたのではないのでしょうか。陶土団研と地学団体研究会は、彼にとって真の意味での大学、あるいは大学院だったのだと想像します。だからこそ多忙な中を地学団体研究会の会長まで引き受けたに違いありません。おそらく中山さんなりに会の展望あつてのことでしょう。彼は、自分を育てた組織を今度はどのように発展させるつもりだったのでしょうか。

中山さんは、自分のめざしている研究を「定性的・定量的動的堆積学」と特徴づけていました。堆積物の供給量と海水準変化で地層の形成を論じるシーケンス層序学にも物足りなさを感じ、堆積物粒子の性質の違いによる運搬・沈積の動的過程や、堆積と侵食が同時に起こる三次元的動的解釈など、従来の堆積学よりも物理的パラメータを増やした解析が必要であると考えていたようです。おそらく、入念な露頭観察から、既存の理論では説明しきれない現象を読み取っていたのでしょう。そうした堆積学は、自分自身の専門領域に関する学問的関心事であると同時に、彼の所属した講座の環境地質学にも貢献したに違いありません。もちろんそれは未完成の体系です。しかし、彼には方向は見えていたと思われる。三次元的なダイナミックな堆積学をめざして、猛烈な勢いでデータを集め、体系づけようとしていたようです。そのような意味での「中山堆積学」を立ち上げる一歩手前まで来ていたといえるでしょう。志なかばにして夭逝されたことが、返す返すも惜しまれてなりません。

本追悼特集号には、当教室外からも、中山さんの愛知教育大学時代の恩師であった河村善也氏（愛知教育大学）、中山さんの博士論文の主査をされた熊井久雄氏（大阪市立大学）、団体研究等で交流の深かった吉川周作氏（大阪市立大学）・百原 新氏（千葉大学）・塚腰 実氏（大阪市立自然史博物館）からご寄稿をいただきました。また、当教室教官・大学院生・卒業生および島根大学埋蔵文化財センター等からも多数の追悼文および論文を投稿していただき、予想を超えるボリュームの特集号となりました。これらは皆、中山さんの人柄と人望および卓抜した研究業績を物語るものであると改めて感嘆し、また、投稿していただいた皆様に感謝申し上げます。

なお、中山さんの3人の御遺児の育英に関しては、故中山勝博氏遺児育英基金募金会（会長 小室裕明）に対して多くの方々から多大な善意を頂戴いたしました。この会の代表として、ここに記して心より感謝の意を述べさせていただきます。



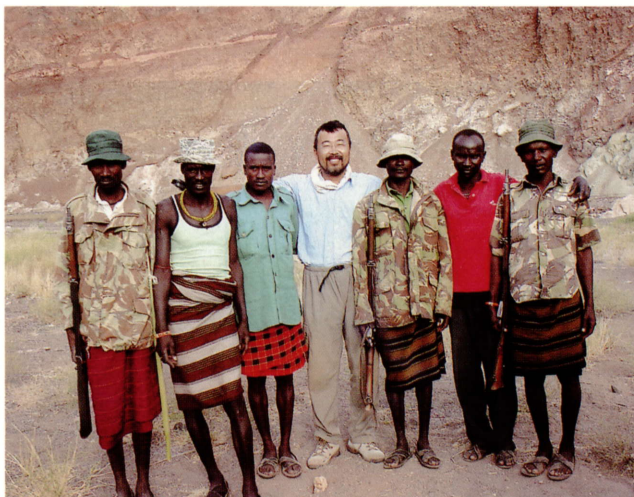
中山勝博先生



陶土層から見いだしたご自慢のペグマタイト起源の石英巨晶の前に。



ケニアの地質調査。京大大学院生，ケニア国立博物館員およびワーカーと，1998年。



ケニア国立博物館現地スタッフ，ワーカーおよびガードマンと露頭の前で，2001年。



道路わきの赤道標識で，2001年。



ネパールトリブバン大学に招かれて、1996年。



学生・大学院生と陶土層材化石の上で、1998年。



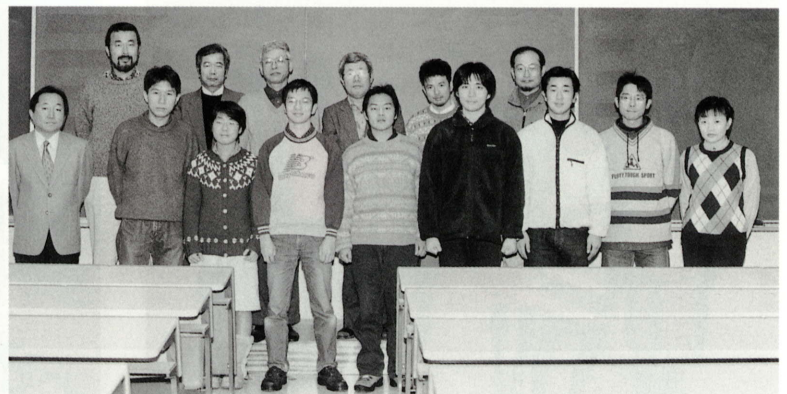
地学団体研究会日曜巡検(鳥取大・広島大との合同巡検；鳥取砂丘等)の後、羽合町香宝寺ユースホステルでの打ち上げコンパ。学生に囲まれてご満悦の中山さん。1998年。



卒業式後、指導した学生とともに、1997年。



オーストラリア在外研究員として、クィーンズランド大学留学時のシドニー訪問の際のこま。



環境地質学ゼミのスタッフ・学生と共に、1999年。